

なぜ私たちのテーマは独創的であると判断されたのか

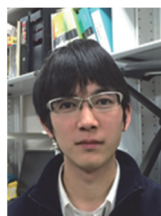
—サマーデザインスクール2015に参加して—

Why was our outcome in Summer Design School judged creative?

岡 隆之介

OKA, Ryunosuke

京都大学大学院教育学研究科教育科学専攻博士後期課程1回生
京都大学デザイン学大学院連携プログラム1期生



1. はじめに

私は今年度のサマーデザインスクールに参加した。サマーデザインスクールにおける私個人の意見を述べるなら、プレゼンテーションにおいて完成品を呈示したテーマはどうしても魅力的にうつってしまうのである。たとえば、今年度の待望賞を獲得したテーマ24「老人とIT」の“BUTSU-COM”も、最終プレゼンで段ボールで作成された仏壇を展示するという、面白い発表スタイルを取っていた。この発表を聞きにいった実際に仏壇を前にして手を合わせたときに、私はこの仏壇が私の家族のもとにあったらどうなるだろうかと、妄想が膨らんでしかたがなかった。

本文では、完成品を呈示することが、サマーデザインスクールにおいて独創的であると判断されることに深く関連していると主張する。私自身、この主張が妥当であるのかに関して明確な根拠を持っている訳ではなく、どちらかというところ個人の経験的な視点からこのような主張をしているという点をご理解いただきたい。また、本文で論じた独創的な評価に関しても、あくまでサマーデザインスクールに特有の視点から、私が論じているという点をご留意いただきたい。

2. サマーデザインスクールで独創的であると判断されるためにはどのようなテーマ設定が求められるのか

本サマーデザインスクールで、私は図鑑を作成するというテーマに参加した。本節では私たちのテーマが独創賞を受賞したことを踏まえて、来年度以降のサマーデザインスクールで独創的であると評価されるようなテーマはどのように設定されると良いのかについて、今回や過去のサマーデザインスクールで私が

感じたことも踏まえながら整理することを目的とする。ここで私は、サマーデザインスクールにおいて独創的なテーマを持つべき要件とは、最終プレゼンで完成品を示すことであると主張する。

デザイン学のように、多くの領域にまたがって研究を行っている人々が集まる場で、お互いの考えを共有する場合に、私たちはしばしば「どのような手段によって意思疎通をはかるか」で苦勞することがある。たとえば、実際にある（あるいは、構成する）建築物を中心に議論する建築学専攻の学生と、構成概念という人が持っている想定される心の機能を中心に議論する心理学専攻の学生では、お互いの考え方を伝える手段が異なるために、意思疎通がはかれないということがままある。このように背景が異なる領域間での意思疎通を可能にする一つの手段が、実体をベースに議論するということである。実体を示すことの最大のメリットは、考え方の違う研究者間で指示対象（私たちの例であれば図鑑）について議論することができるようになるということである。先の建築学専攻と心理学専攻の学生の例で言えば、建築学専攻の学生に特定の建築物をつくってもらうことで、心理学専攻の学生がその空間がもつ特性が人にどのような印象を与えるかを評価することができるようになる、という具合である。

サマーデザインスクールでは各テーマの過程をひとりひとりに時間をかけて説明する時間がないという現状も、完成品を見せることがそのテーマの評価をあげることに寄与していると考えられる。最終プレゼンでは20を超えるテーマが同時に発表を行うために、どれだけ丁寧な過程を経ても、その過程をじっくりと一つずつのテーマが説明する時間はない。こうしたなかで完成品を示すことは、その過程についての推論を聴衆にゆだねることができるという強みを持っている。事例的ではあるが、本テーマの発表を聞きにきてくれたデザイン学の教員、本科生、そして予科生の中には、図鑑をみた段階で私たちが何をしてきたかの過程がわかるといってくれる方もいた。過程ではなくあえて結果にこだわることで、かえって参加者に過程に対する理解を促すということもあるのではないかⁱ。

3. 私たちのテーマの何が独創的であったか

本節では独創的な対象がもつ要素を、私たちのテーマが持っていたかを、私自身の体験を踏まえながら議論する。はじめに、私たちのテーマとその成果に「希少性」という点で価値があったかについて考えると、これは私たちのテーマ

ⁱ ありがたいことに、私たちのテーマは過程賞においても第3位の得票であった。この結果の解釈は様々あるが、結果にこだわったことが功を奏したのではないかと考えている。

に良く当てはまっていたと思う。特に、他の発表と比較して、私たちのテーマは数少ない完成品をみせたテーマであったという事実は重要であると思う。私の記憶する限りにはなるが、実体をもつ完成品で、一から作りその細部にまで気を配った作品を呈示したのは、今年度のサマーデザインスクールにおいて私たちのテーマだけであったと記憶している。完成品をみせるということは評価者に対して、Finke *et al.* (1992)の基準（こちらについては後で詳しく述べる）に照らし合わせると、生産性と柔軟性、そして市場性と実現可能性を評価しやすくさせると考えられる。実際にプレゼンの際には、いくつかの企業の方々から「今回の成果を商品化することは考えていないのか」というありがたいコメントもいただくことができた。完成品をみせたテーマが少数であったために、私たちのテーマが商品化についてのオファーをいただけたのかもしれない。

続いて、私たちのテーマとその成果は洞察にとんだ賢さを持っていたと思う。私たちが作成した図鑑は『愛と間合い』、『靴裏』、そして『八百万の神』と、図鑑の対象自体は奇抜な物であったが、どれもが知的な好奇心を喚起する対象であったと思う。特に、『愛と間合い』は心理学的にも興味深く、対象間の距離感と陰影だけでも私たちが他者の関係性に対する推測をこんなにも働かせることができってしまうという実感を持つという点で示唆的であると考えられるⁱⁱ。また、私が参加した靴裏図鑑は靴のすり減り具合から、その靴の使用者の歩き方の癖などを発見することはできないだろうかという疑問から始まっていた。靴の裏側のけずれ具合のみによって分類した靴裏図鑑は、ユーザーの使用状況からユーザーの使用特性を逆推論しようとする、人間工学的にも意欲的な取り組みであったと考える。

これら二つのことは、人が何をもって独創的であると判断するかに関する心理学的な根拠に、おどろくべきことに対応するのである。私たちのテーマは、後節で紹介する独創的な作品がもつ特徴である (i) 数として希少であること、そして (ii) 洞察にとんだ賢さをもっていた。こうした理由が当てはまったために、私たちのテーマは独創的であったと評価されたのではないかと考える。

4. 私たちはどのような対象を独創的だと判断するか

本節では旧来の心理学の知見が示してきた、独創性判断に影響を与える要因について概観し、どのような対象が独創的であると判断されるかについて理解

ⁱⁱ 間合いをはじめとした、非言語的なしるしによって人間同士の関係性を推測する能力が備わっていることを紹介した興味深い資料として、バターソンの『ことばにできない想いを伝える：非言語コミュニケーションの心理学』（誠心書房）があげられる。

を深めることを目的とする。なお、本節では独創性（originality）と創造性（creativity）を同様のものとみなして議論する。この二つの概念は厳密には異なると考えられるが、サマーデザインスクールにおける独創賞の評価基準である、「もっとも独創的な成果を出したテーマ」という曖昧な定義からは、素人である私たち参加者にとって独創性と創造性を区別して判断することは困難である。これらを踏まえて、本文では独創的であることと創造的であることを区別しないで、創造性の知見を援用して独創性評価に影響を与えた要因について議論する。

心理学では、ある対象が創造的であるとする要因はさまざまであることが指摘されている。古典的な研究としては、Finke, Ward, and Smith (1992)ⁱⁱⁱが創造性の判断に影響する六つの要因を指摘した。すなわち、独創性（反応の相対頻度の観点から希少であること^{iv}）、実用性と賢明性（創造された対象が実用的な価値を持つか）、生産性と柔軟性（創造された対象がどれだけの時間をかけて作られたか、その対象はいくつの用途を持っているか）、市場性と実現可能性（潜在的な市場に対して生成された対象はどれほど価値を持つか、そのアイデアは実現可能であるかどうか）、包括性（生成された対象は既存の価値をどれだけ内包しているか）、そして洞察性（生成された対象は何個の異なる知識領域と関連しているか）である。また、Silvia, Winterstein, Willse, Barona, Cram, Hess, Martinez, and Richard (2008)^vは創造性判断の基準として、その対象がみないものであること（uncommon）、その対象が日常的なアイデアから遠くにあること（remote）、そしてその対象が洞察にとんだ賢さを持つこと（clever）をあげている。Finke *et al.* (1992) と Silvia *et al.* (2008)の二つの知見の共通点を考えると、独創的なものは (i) 数として希少であり、(ii) 創造された対象が洞察にとんだ賢さを持っていることが期待される。

5. 終わりに

私が今年度のサマーデザインスクールで参加したテーマ18「文化的な視点の発見と知的好奇心による図鑑」は、独創賞と最優秀賞を同時受賞した。最優秀賞に選ばれた理由は、ひとえに圧倒的な量の独創賞の票を手に入れたおかげであ

ⁱⁱⁱ Finke, R. A., Ward, T. B., and Smith, S. M. (1992). *Creative Cognition: Theory, Research, and Applications*, Cambridge, MA: MIT Press.

^{iv} 独創性をこの定義と評価する限りにおいて、サマーデザインスクールでの投票において私たちのテーマがそれ自体希少であったためだけに、独創的であると評価されたとは考えづらいだろう。

^v Silvia, P. J., Winterstein, B. P., Willse, J. T., Barona, C. M., Cram, J. T., Hess, K. I., Martinez, J. L., and Richard, C. A. (2008). Assessing creativity with divergent thinking tasks: Exploring the reliability and validity of new subjective scoring methods. *Psychology of Aesthetics, Creativity, and the Arts*, 2, 68-85.

った^{vi}。最優秀賞の受賞時に私たちは投票された全ての票をみることができたが、これらの7割がたは独創賞の票であったと記憶している。本稿では、なぜ私たちのテーマはサマーデザインスクールにおいて多くの参加者から「独創的である」と評価されたかを議論した。何がテーマを独創的と感じさせるかについて考えることは、今後のサマーデザインスクールをより盛り上げていく上でも重要であるように思う。

本稿ではサマーデザインスクールで私たちのテーマが独創的であると判断されたのはなぜかについて論じた。はじめに、独創的と判断されることの心理学的な視点と本テーマの受賞を踏まえた上で、サマーデザインスクールで独創的であると判断されるためにはどのようなテーマ設定が求められるのかについて、今回のサマーデザインスクールで私が感じたことも踏まえながら整理した。続いて、心理学が指摘してきた独創性の要素を私たちのテーマが持っていたのかについて議論した。最後に、こういった対象をさして私たちが独創的（あるいは創造的）であると判断されるのかについて、心理学がどのような視点を提供してきたかについて整理した。

「デザイン学」への問い

- + 私たちはどのようなテーマを創造的であると判断するのか
- + 領域普遍的な創造性はあるのか

^{vi} 今年度のサマーデザインスクールでは独創賞（もっとも独創的な成果を出したテーマ）、待望賞（もっとも「是非実現してほしい！」と思われたテーマ）、過程賞（もっともいいプロセスをたどったテーマ）の三つの賞に対して投票が行われた。最優秀賞はこれら三つの賞に対する投票の総和が最も大きかったテーマに与えられた。